

川武次郎の生家は食料品の輸入業を営んでいたようで、武次郎は外国人と接する機会も多く、一般の日本人のように彼らを恐れることもなかったと思われます。このようなことから英会話や経営学も学び、多くの外国人と懇意となったようです。<sup>(1)</sup>そして、知り合った外国人に日本の神話、民話など伝承文学の翻訳を依頼したのでしょう。武次郎は宣教師、大学教員、外交官、軍人、家庭婦人などに翻訳の仕事を託しています。

### 外国人たちが確認した「<sup>かんぜんちゆうあく</sup>勸善懲悪」の思想

明治時代に入ってから来日した外国人は、浮世絵など日本の美術工芸品が展覧された1862(文久2)年の第2回ロンドン万国博覧会や1867(慶応3)年に開かれたパリ万博後の日本ブームの高まりとジャポニズムの隆盛<sup>(2)</sup>などで日本人や日本の文化をある程度理解しており、武次郎の計画への理解も早かったのではないのでしょうか。

特に、伝承文学の翻訳にあたった外国人はこの仕事を進めながら、西洋の伝承文学との同一性を悟ったのではないかと考えられます。それは粗筋に見られる「勸善懲悪」の思想です。「良きを勧め、悪しきを懲らしめる」、この倫理と道徳が全国の津々浦々に強く浸透していることを知り、日本人に対する安堵感や尊敬の念も増したことと思われます。我が国の伝承文学の根底にこの思想が流れていることを知った一部の外国人翻訳者は、自分で日本風の物語を創作することもしています。

### 日本研究書としてのちりめん本

武次郎は明治18(1885)年に英語版のちりめん本で「日本昔噺」シリーズ第1号『桃太郎』を刊行しました。その後、20話の昔噺が刊行され、一部はフランス語、ドイツ語、ポルトガル語、スペイン語などにも重訳の上、出版され多くの外国人に読まれました。

また、武次郎は日本の文化についてのちりめん本も作っています。これは専門性を異にする外国人が原稿を書いたもので、厳密な意味での比較文化論とは言えませんが、この日本論は16、17世紀『桃太郎』(本学図書館所蔵)のキリスト教布教時、鎖国期のオランダ人を中心とした時期、幕末期の欧米人を中心とした時期に次ぐ、明治初期の欧米人による日本研究書に含まれるもので、海外資本の書籍業界と提携



して外国にも輸出されました。さらに、後発のちりめん本の出版者も出現して、工夫をこらしたちりめん本を作りましたが、量的に見て武次郎の事業を陵駕することはありませんでした。武次郎や後継者たちが優位性を維持できた要因は武次郎が築いていた豊富な外国人との人脈であったといえるのではないのでしょうか。

### 伝統技術の粋を集めたちりめん本の拵え

こうして作られたちりめん本は、江戸時代の本を作る技法が取り入れられています。絵師、彫師、摺師など一連の仕事、すなわち右の写真に見られる「摺り場」の流れは鎖国体制の中で発展してきたものです。特に絵師が描く浮世絵の技法は江戸時代中期に確立されたものです。また、木版や和綴じなどの歴史はさらにそれ以前の奈良時代にまでも遡ります。さらに、ちりめん状、すなわち縮入りの和紙を使った浮世絵は江戸時代にも見られます。ちりめん本とは、このような我が国の伝統的な技術の粋を集めて作られた美術工芸品と捉えることもできます。そして、翻訳や文章の作成段階を含めて広く考えるならば、日本人と外国人の共同作業でもあったのです。



『絵でみる日本人の生活』(本学図書館所蔵)

### 文明開化期の対外交渉と国際交流

これまで見てきたように、江戸時代末期から明治前期までに来日した外国人の様子は浮世絵として描かれて全国に流布し、日本人は異文化を知ることになりました。また、我が国の伝統的な技術を使った欧文挿絵本は、在留外国人だけでなく海外での書籍販売網に載せられ、民俗や風俗、さらには習慣など、日本と日本人が理解されることに大きく貢献しました。

この展示会では、文明開化期の絵画や書物によって、この時期の対外交渉の姿と国際文化交流の一端を打ち出していたのです。

註1)石澤小枝子著『明治の欧文挿絵本 ちりめん本のすべて』215頁 三弥井書店 平成16年。

(2)日野永一「万国博覧会と日本の「美術工芸」」(吉田光邦編『万国博覧会の研究』)22頁 思文閣出版 2004年。

おく まさよし(司書・図書館事務長兼管理運営課長)